

ハロー山梨第5回公演

揺籃

ゆり

かご

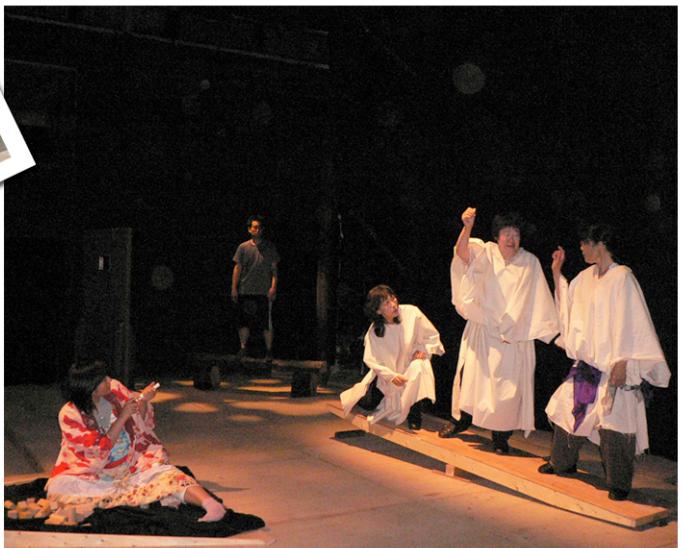
神が悪魔を、悪魔が神を創ったのか。
悪魔が人間を、神が人間を創ったのか。

人間が神と悪魔を創ったのか……。

悩める予言者たちは、いつになれば安らぎを得られるのか。

That is the question.

三陸沖から来たという若い女性が、
希望という名の扉を開いてくれるはず。



スタッフ

プロデューサー	山本 真樹
脚本	藤谷 清六
演出	水田 拓
演出助手	高山 美香
舞台監督	原 和人
舞監助手	荻原 京子
照明	飯野 洋光 原 恵子
装置	B-BLACK
メイク	設和 幹 田中 来実
音響	山本 良英
映像	鷹野 亮司
広報	古屋 武 小池 実子
制作	磯野 波平 伊藤 和雄
岩手の方言	菅原 哲夫
大阪の方言	山塚希生子
スチール写真	山中 勲

■日時/2007年6月30日(土) 18:30開場・19:00開演
2007年7月1日(日) 13:30開場・14:00開演

■場所/桜座

開幕によせて

砂と水と豆鉄砲

山梨県立大学教授 浜崎紘一



今回の「搖籃」という短編は、藤谷清六氏にしては珍しく観念的な芝居である。「学生時代に安酒を飲みながら、徹夜で友人たちと実存主義哲学について議論したことを思い出しながら書いた」そうだが・・・。神、悪魔、三人の聖者たちが、混沌とした宇宙や生命のことをちょっとふざけながら議論しているのだが、テロやイラク戦争など今日の諸々の難問を次々に想起させていくのはやはり清六芝居だ。

稽古場に行ってみて驚いたのは、平均年齢六十五・五歳という女性たちのパワー。最高齢七十歳とは思えぬ声と体力である。主役の若い女優の東北弁と相手役の大坂弁が飛び交うのも意外で、耳に楽しい。あの砂と水の含意は何なのかも気になる。プロとアマの垣根を越える試みとして、新人会の中堅俳優、永野和宏氏が客演している。

演出は水田拓氏。役者たちに繰り返し繰り返し基本を訓練していた。氏のねばり強く真摯な芝居づくり、それに応えようとする役者たちの熱気が伝わってきた。臨月を迎えた女は「夜店の屋台で売っている豆鉄砲」を取り出して神々を・・・そして「気配の神」に癒される。生まれてくる赤ん坊の未来は人類の希望だろうか?・・・そうであって欲しいものだ。私はいま客席の片隅で、胸の高鳴りを押さえながら幕が開くのを待っている。

出演者の言葉



ここではないどこか

砂場の女 八木 泉 (劇団コメディー・オブ・イエスタディ)

ウィーン少年合唱団がアンコールで、「アメリカ物語」の“somewhere out there”を歌った時のことだ。その様子を一言で言うなら「若さ爆發」。「ここではないどこか」に希望を託す静かなこの歌を、彼らは他のどの歌よりも熱唱していた。私には「ここではないどこか」に自分の居場所を求めて、ずいぶんあちこち転々とした時期がある。「搖籃」に出てくる女も、物理的には彼女が言ったとおりかどうかはわからないけれど、精神的には「ここではないどこか」を求めてじたばたした類にみえる。ひょっとしてそんな場所などこの世のどこにもないのではないか、とあきらめかけた頃、環境がめまぐるしく変わり、そんなことを考えたり、ふらふらしてもいられなくなってしまった。

家路を急いでパラパラと席を立つ人たちがいる中で、私はじっと彼らを見つめていた。うらやましいような、安堵するような、圧倒されるような、寂しいような、いろんな感情に揺さぶられながら。



私の中の魔物

男A 土井 マチ子 (フリー)

公演の日が近づいて来ると、“なぜ、芝居なんかしてるんだろう” “もうこれで終わりにしよう” “観ていただける舞台になっていない” “もう一週間あれば”・・・などと、埒もない思いにかられて、ひどい鬱になる。そして、なんとか大過なく幕が下りホッと胸をなでおろす。しばらくすると、またいつの間にか新しい台本を手にしている自分がいて「何だお前は、言って（思って）いることとやっていることがあるで違うじゃないか、懲りないヤツだ！」と自己嫌悪に陥る。こんな繰り返しをしてしまう私の中には魔物が棲みついているようだ。

間もなく今日の幕が上がる。皆様の叱正をしっかり受け止め、楽しんでいただける舞台目指して、全力で、つとめさせて頂こう。



あずさに乗って

男B 永野 和宏 (新人会)

劇団新人会に入団して今年で十年目になります。普段は学校公演を中心に都内をはじめ全国を旅しています。藤谷さんの娘さん夫婦と僕は「演劇集団円」の研究所で同期生でした。その様な関係で今回の公演に参加させて頂く事になりました。甲府の方々との稽古では、技術云々の前に水田先生のご指導で必ず基本練習を繰り返します。今まで「自分には出来ている」と思っていた発声や呼吸法の基礎を改めて見直す事ができました。今回は桜座の舞台を縦横無尽に駆け回ります。そのためにという訳ではないのですが、春先からダイエットを開始し、80キロあった体重を、68キロまで減量しました。この「搖籃」というお芝居は、悲劇と喜劇がほどよくブレンドされ、しかも様々なメタファーが用いられた、味わい深い作品です。皆さんの純粋な情熱に動かされて、今日も僕は新宿駅から「あずさ」に乗っているのです。



老いては孫に従え

きき

山本 洋子 (ハロー山梨)

私は今、この「揺籃」というお芝居の稽古へ通っています。そこには演出家、プロデューサーも含めて60歳代の仲間が大勢います。とんでもないセリフの言い間違いや失敗が頻発し、思わず吹き出したり大笑いしたりして、とても賑やかです。また、稽古後に演出家から、新劇の歴史などの話を聞いていると、とても楽しく、学生時代にタイムスリップしたようです。

ところで、我が家に孫たちが来ると、テーブルクロスを幕がわりに、こたつを舞台にして劇が始まります。そして魚たちや動物園の物語、背中に風呂敷をしようとした泥棒の話、空から降ってきた人形の物語などを演じてみせてくれます。その真剣な演技の面白さといったら・・・お腹を抱えて笑い転げてしまいます。孫たちには、とてもかなわないでしょうが、私も今日の舞台で、彼らのように、生き生きと楽しいお芝居が出来たら・・・と願っています。



夏のはじめに

のの

野田 純子 (アドシアター)

夜遅く家に帰り着いた。突然蛙の合唱に包まれた。今日は苗代がつくられたのだと思った。これから当分、蛙の発声練習が聞こえる。いや、毎日が本番なのだともう思う。素晴らしい。朝の小鳥の鳴き声、救急車のサイレンに負けまいと吠え続ける犬、甘えるように鳴く猫、みんな上手に声を出している。

夕立に慌てて飛び込み、一瞬の雷鳴に驚き、虹に微笑む。天体ショーに身体が動いている。四季折々の風に喜び、次に訪れる季節の準備をする。「今年もまた良いお芝居を観に行こうね」と話しながら。



優しさを忘れずに

てて

角田三智子 (アドシアター)

日曜日、窓ガラスから朝日が差し込み、私は鳥の声とともに目が覚める。さあ起きよう。家族にお早うと声をかけ、目があつたら微笑み、優しい一言もかける。笑顔と優しい言葉は、私にとって悲しみや苦しみと戦う武器だ。私の一日は15分間の瞑想から始まる。穏やかな気持ちになり心も和む。今日も生かされている?体も自由に動かせる。体力もある。言葉も喋れて声が出る。当たり前のようだけど幸せだ!!燃えてうち込む舞台があるから充実している。今まで自分には出来ないと尻込みしていたことを、やろうと決心した時からもう一人の自分が見つかった。どんなに疲労していても稽古に燃える。私の心に自信と勇気が湧いてくる。焦らず、怠けず、続けたい・・・優しさを忘れずに。

本日は神々の大集合『聖なる大地』桜座へようこそ!!ありがとうございました。



ある日のこと

気配の神

惣角美榮子 (劇団やまなみ)

一人暮らしの私(64歳)の家へ、久しぶりに埼玉県から息子が遊びにやって来た。私の電話代の領収書を見た息子がNTTに電話をかけ「それはキャンセルして下さい。」と言っていた。どうも私は不必要な電話代を長い間払っていたようだ。その日は奇しくも母の日、娘から鉢植えの薄いピンク色のカーネーションが、お嫁さんからは品の良いエプロンが送ってきた。息子のおかげで、これから毎月の電話代が五百円安くなる事も嬉しいプレゼント。私はとても幸せでした。きっとこのお芝居の気配の神様がくれた贈り物だったのでしょう。

この芝居に出してくれた藤谷さんと水田先生にも感謝しなくては・・・。そして何よりもご来場のお客様に感謝・・・本当にありがとうございます。



青天の霹靂

修行僧

ゆう (劇団B-B LACK)

はじめまして、劇団B-B LACKに入団してまだ3ヶ月の新人です。今回の舞台「揺籃」の大道具作りをしている時、プロデューサーの藤谷さんから、突然、役者として出演してくれないかと言われました。本番まであと一週間。まさに晴天の霹靂「絶対無理だ」と思いました。でも、セリフなしの若い修行僧の役と聞いて、清水の舞台から飛び降りるつもりでお受けしました。演出の水田先生に「この無言の修行僧の役こそが一番難しい、よほど稽古をしなければね。」と言われ、急に緊張してしまいました以前、僕はお経を聞いたり、般若心経を唱えたりしたことがあります。その経験が少しでも今回の舞台に役立てばいいと思っています。



明日はわが身

山梨英和大学教授

川口清泰

藤谷氏とは数ヶ月前に、ハロー山梨のYaYaYaTVでのインタビューを受けて以来、親しくさせていただいている。彼の恐るべきエネルギーにはいつも驚かされている。食事を楽しんでいる間も、過去の作品、現在書いている戯曲、将来手がけるであろう芝居の話が、よどみなく彼の口から飛びだす。彼は、若い頃に情熱を注いだ演劇活動を長いこと封印して、仕事第一で過ごしてきたという。つまり、昨今の戯曲・演出・映画関係の作品は、すべてこの数年の出来事なのだ。しかも、その間に、ゴルフ、美酒・美食に浸っている。また、どんな話題になっても、むずかしい顔をして抽象的な議論をもてあそぶことがない。自らの経験に裏打ちされた、地に足の着いた意見を述べる。そして彼の精力的な活動と情熱に押されて、来年の芝居には、既に当然のこと私はデビューを決められてしまっている。つまり今回の『搖籃』を拝見する私は、「明日はわが身」という気持ちなのだ。

呼吸の技を磨くこと

演出

水田 拓

「搖籃」は、私が主宰する発声ワークショップのテキストであったが、生徒たちの希望で桜座で発表会をすることになった。

私たちは歩き呼吸し、不自由を感じることなく生活している。そして誰もが自分は当たり前に歩き、当たり前に呼吸していると思って疑うことがない。そして、本来の歩き方を教えられたりすると、「なるほど」と納得し自分のおかしな歩き方に気づく。

しかし、呼吸は見えにくいので、呼吸の良し悪しを教えるのは厄介だ。

普段の生活で自分はどんな呼吸をしているかは、改めて考えることはしない。私は深い呼吸に関心を持って欲しいと思う。と言うのは最近の子供たちは楽しげに喋ってはいるが、深い呼吸をせずに、口を開けたままの浅い呼吸しかしていない。だから、ちょっと大きな声を出すだけで、すぐに喉が痛くなる。本来、声を出すことは楽しく、身体が喜ぶことなのに、最近ではむしろ苦痛になっている。この浅い呼吸は若者たちの変な日本語、授業に集中しない子供とも深い関係がある。

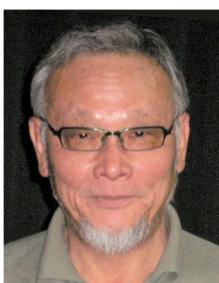
表現は呼吸であるとよく言うが、呼吸を巧みに操り表現しているように見える人の中にも、浅い呼吸だけで喋っている人を見かける。これでは聞き手の心に響く言葉にならない。私は稽古場で、表現の技術は呼吸の技を磨くことで身に付くものだ、と繰り返し言いながら発声の基本練習に多くの時間をかけてきた。



御礼の言葉

脚本・プロデューサー

藤谷 清六



私は、世界各地で起きている紛争を見るたびに、森羅万象全ての物の中に神々が居る、と恐れおののいていた頃つまり教義の一神教が発生する前の時代に、人々の心が戻れたらいいのにと思います。そんな気持ちでこのお芝居のプロデュースをしました。脚本では登場人物は男性六人、女性一人という構成ですが、諸般の事情で、逆に女性が六人となりました。しかし、演出の水田拓先生のお陰でかえって面白くなつたと思います。今回もまた舞台の裏を支えて下さった飯野洋光先生、原和人さん、山本良英さん、劇団B-B L A C Kの方々をはじめ、多くの方々から温情あふるるご助力をいただきました。美術・メイクなどを担当していただいた画家の設和幹先生とは、楽しい異業種交流会のようでした。また、岩手の菅原哲夫さんと大阪の山塚希生子さんに、方言の情報をいただきました、この場を借りて御礼申し上げます。そして何にもまして、本日ご来場下さいましたお客様に心より感謝いたします。本当に有難うございました。

次回公演のご案内

第6回 ハロー山梨 プロデュース公演

脚本・演出 藤谷 清六

「翔べない二人」

日 時：2007年12月8日（土）18:30開場 19:00開演
2007年12月9日（日）13:30開場 14:00開演

場 所：県立文学館講堂

チケット：前売り 1,000円 当日 1,200円

現代の夫婦間の諸問題が、笑いとペーススをまじえながらシリアルに迫ってくる。
浮気をやめない初老の男と、曲がったことが大嫌いという妻。歯に衣着せぬ二人の口論がいつまでも続く。男女五人による五組の夫婦がオムニバス形式で繰り広げる夫婦喧嘩。どうぞご期待下さい。

出演者： 安達 朋之 雨宮 徹志 高橋 誠
山本 洋子 野田 純子 H A N A

牛山 昭彦 原 和人
角田三智子 八木 泉